

# 白金葎

3月号



平成27年3月発行

第49号

# 白金葭定例会案内

四月十七日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第四 兼題：スイートピー、蛤

五月一日(金) 10:00 ~ 17:00 築地市場、東銀座区民館

五月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三 兼題：苗売、薔薇

六月十九日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三 兼題：グラジオラス、鮎

スイートピー、蛤の参考句(四月十七日分)

蔓伸びて伸びてスイートピーつけて

紫の数かちゆきぬスイートピー

眉描いて女給ら貧しスイートピー

佳きことがスイートピーに重なりぬ

スイートピー抱へてことばなくてよし

スイートピー挿して妻にも閑すこし

蛤の芥を吐かする月夜かな

蛤を搔く手にどろと雄波かな

蛤を逃がせば舌を出しにけり

蟹気楼吐く身構への蛤か

蛤の十ばかりなる軽ろからず

蛤のかにかく重し数知らず

蛤を焼くやどこかに宵の火車

蛤のこりと動く夜の厨

中村汀女

星野立子

富安風生

浜井武之助

山上寿衣

白扇子

小林一茶

高浜虚子

〃

大場白水郎

菅原成辰

林 翔

竜岡 晋

石丸泰子

月例会会報( '15 / 3 / 20 8名欠2 ) (斑雪、白子)

飯田孝三

世界遺産富士山背<sup>そびら</sup>白子干す

雪国のはだれ一閃新幹線

人間は管切つて繋ぐ喇叭水仙

白鳥帰る蹠<sup>みづかき</sup>水面ばしやらばしや

啓蟄の犬の道草土を嗅ぐ

増田陽一

風の音彼方に雉の伸びあがる

余震あり二月の雲雀地を歩く

逃げ去りし時間の見ゆる残り雪

錦市場白子を掬ふ女の手

生きてゐるうちは影なき白子かな

光成高志

春の月より飛行雲立ちあがる

築地市場白子売場の清潔感

日の光よく通りをり斑雪山

白樺の純林地帯斑雪敷く

白箱に容れて白子の売られをり

光 みち

雛納む雛の檜扇先づ閉じて

ラーメンに白子山盛る浜通り

さにづらふ少女に出会ふ斑雪村

軒下に子守佇む斑雪村

初蝶来座敷深くに紋付けて

吉羽多美子

隠れ湯に身を沈めをり斑雪山

白す干す昼を静かに漁師町

地球儀を廻し春塵払ひをり

海棠に雨奥暗き闇魔堂

幼な子の言葉増えゆき水温む

倉田紀子

鳥の音のさやに良寛の山笑ふ

雛祭障子へだてて嬰のこゑ

み仏の胸に虫食ひ春日さす

花菜漬のせくる昼の配膳車

鳩の餌のあられの美しき斑雪

松村幸一

君と酌むまだ暮れきらぬ斑雪山

全うし得たる双子のしやぼん玉

毀れてもしほさみをきく桜貝

眈に卒寿のなみだ春の夢

蠅ひとつ隠れもなくて白子干

武者昭七

朝日照る浜一面に白子干す

波を背にゆらりゆらりと白子舟

斑雪振り払ひつつバスを待つ

駅前<sup>は</sup>白子御膳の幟<sup>はた</sup>の波<sup>江の島</sup>

常世浪ゆつたり寄せて春の海

浅野正美

湯気の中釜揚げ白子ふつくらと

斑雪姿あらはし農支度

みどり児の手の甲えくぼ桃の花

乳呑み児の重くなりたり山笑ふ  
沈丁花ポチポチ爆ぜて香り出す

青木啓泰

斑雪どつぴんしやんと言つてみる

父と子の厚い唇芝を焼く

泥蓮を引き出し畦へと生きのびる

蓮の根を遺骨と見る程馬鹿でない

蓮を売る無人スタンド蝶発てり

選句結果 (数字は入選数 左添書きは添削句)

4 朝日照る浜一面に白子干す

4 生きてゐるうちは影なき白子かな

3 隠れ湯に身を沈めをり斑雪山

3 みどり児の手の甲えくぼ桃の花

3 余震あり二月の雲雀地を歩く

3 乳呑み児の重くなりたり山笑ふ

2 鳥ごゑのさやに良寛の山笑ふ

2 鳥の音のさやに良寛の山笑ふ

2 風の音彼方に雉の伸びあがる

2 雪国のはだれ一閃新幹線

2 海棠に雨奥暗き闇魔堂

地球儀を廻し春塵払ひをり

逃げ去りし時間の見ゆる残り雪

駅前は白子御膳の幟はたの波は(江の島)

日の光よく通りをり斑雪山

泥蓮を引き出し畦へと生きのびる

花菜漬のせくる昼の配膳車

初蝶来座敷深くに紋付けて

鳩の餌のあられの美しき斑雪

啓蟄の犬の道草土また嗅ぐ

啓蟄の犬の道草土を嗅ぐ

白す干す昼を静かに漁師町

白鳥帰る蹠みづかき水面はしゃらばしや

蓮の根を遺骨と見る程馬鹿でない

人間は管切つて繋ぐ喇叭水仙

(川崎展宏に「人間は管より成れり日短」)

人間は管切つて繋ぐ水仙花

み仏の胸に虫食ひ春日さす

ラーメンに白子山盛の浜通り

世界遺産富士山背そむ白子干す

沈丁花ポチポチ爆ぜて香り初む

沈丁花ポチポチ爆ぜて香り出す

雛納む雛の檜扇先づ閉じて

幼な子の言葉増へゆき水温む

〃

陽一

昭七

高志

啓泰

紀子

みち

孝三

多美子

孝三

啓泰

孝三

紀子

みち

孝三

正美

みち

多美子

幼な子の言葉増えゆき水温む  
 斑雪どつびんしやんと言つてみる  
 君と酌むまだ暮れきらぬ斑雪山  
 春の月飛行機雲の立ちあがる  
 春の月より飛行雲立ちあがる  
 白箱に容れて白子の売られをり  
 雛祭障子へだてて嬰のこゑ  
 全うし得たる双子のしゃぼん玉  
 蓮を売る無人スタンド蝶発てり  
 波を背にゆらりゆらりと白子舟  
 斑雪振り払ひつつバスを待つ  
 毀れてもしおさみをきく桜貝  
 毀れても潮騒を聞く桜貝  
 築地市場白子売場の清げなる  
 築地市場白子売場の清潔感  
 さにづらふ少女に出会ふ斑雪村  
 軒下に子守佇む斑雪村  
 斑雪姿あらわし農支度  
 斑雪姿あらはし農支度  
 毗に牟寿のなみだ春の夢  
 錦市場白子を掬ふ女の手  
 常世とよ浪ゆつたり寄せて春の海  
 常世浪ゆつたり寄せて春の海

啓泰 幸一 高志 紀子 幸一 啓泰 昭七 幸一 高志 幸一 陽一 昭七

父と子の厚い唇芝を焼く 啓泰  
 父と子の唇厚く芝を焼く  
 湯気の中釜上げ白子ふつくらと 正美  
 湯気の中釜揚げ白子ふつくらと  
 白樺の純林地帯斑雪敷く 高志  
 白樺の純林深む斑雪哉

# 一句鑑賞

光成高志

## 朝日照る浜一面に白子干す

昭七

朝日が差し来て照る浜辺一面に白子を干してある情景  
 である。朝日といい、白子といい、清らかな風景である。  
 やまとこゝろを象徴する「朝日に、ほふ山さくら花」に  
 近い感慨が湧いてくる。浜一面に干した白子は未見であ  
 るが、「漁婦の手に浜一面の白子干」（片岡良子）という  
 句があるから現実の景なのであろう。私はいつも富士川  
 の河川敷一面の桜海老干しを想像してしまいが、この白  
 子干場も美しい景であるに違いない。

## 鳥の音のさやに良寛の山笑ふ

紀子

鳥の声が清さやに聞こえる良寛の山に草木が一齐に若  
 芽を吹く明るい春が来て、山笑うが如くである。出雲崎  
 の山か五合庵のある国上山かもしれない。日本海に面し  
 た厳しい冬を過とし、やうやく春の気配がして山笑う頃  
 の描写である。作者の良寛を敬愛する心ばへが伝わる佳

句。良寛さんのことを書きたいが我慢する。

## 余震あり二月の雲雀地を歩く

陽一

齊藤茂吉の歌「千葉県より恋のこころに告げていふきさらぎ空に雲雀啼くとぞ」を下敷きにして現代を詠ったと作者の自解があつた。余震のあつた二月の雲雀は地を歩いている。揚雲雀になるどころではないのだ、雲雀とて地を歩くというこの時代の不安な風潮を暗喩しているのである。「余震あり」で本震を想像させ、茂吉の本歌を使つて東日本大震災の俳句に仕立てた手腕に脱帽です人間は管切つて繋ぐ喇叭水仙

孝三

この度、作者は胃の手術を受けられ初期の癌を克服されました。その経験から掲句を投句されました。私は取りませんでしたが、コビアンにて三人の合評がかまびすしく珈琲がすぐ飲み干されました。川崎展宏の「人間は管より成れり日短」句の換骨奪胎を図られたものでしょう。有名な句なので、この詞書は不要との意見あり。喇叭水仙はいい過ぎ、水仙花で十分意は伝わる、そう抑えた方がよい、しかし作者はここを言いたいのでは、展宏の下五の季語はよく利いているが、掲句は、「人間は」という出だしと喇叭水仙は普遍性にかつきはしないか、と喧々譁々となりました。こういう境涯句は日を持つて醸成されるものと思います。生々しい己の体験を客観化して作句できるのも君子たる俳人ではなかるうか。

泥蓮を引き出し畦へと生きのびる

啓泰

霞ヶ浦辺の土浦側に蓮田が広がる。昔よく見に行つた。師走の冬が最盛期で「蓮根掘る」は冬の季語となつてゐるが、春先でも掘つたり売つたりしているのだ。ポンプでホースに水を送りその水圧で蓮を傷つけないように掘つては舟に積み積みしてへとへとになつて、最後の泥付き蓮根を引き出して畦へ上つた時の自嘲ではないだろうか。やれやれ死にもせず、生きのびたわい、と自問自答しているのだ。これが俺の人生だわい、わあはっはあーと笑い飛ばしている爺さんを想像する。いやその時は、啓泰さんがその爺さんになつてゐるのだ。同感々々と思つて追加選をしました。瞬間選では追付かない諧謔があることに気づきました。

## 一句鑑賞

武者昭七

さにづらふ少女に出会ふ斑雪村

みち

「さにづらふ」は古語で、「さ」は接頭語、「に」は丹で赤色、「づら」は頬。「さにづらふ妹を思ふと霞立つ春日も暗に恋ひ渡るかも」(万葉集)などの用例がある。はだれの降る山里の村で赤い健康そうな頬をした少女に出会つたというのである。そんな無垢な少女に出会つた驚きと感動が古語を呼び覚ました。軒下に子守佇む斑雪村も同時の作とか。さにづらふ少女も子守の少女もめつた

にお目にかかることのない時代になってしまった。

### 人間は管切つて繋ぐ喇叭水仙

孝三

傍注に「人間は管より成れり日短」(川崎展宏)の句を引いているからそれを踏まえての作である。「管切つて繋ぐ」は作者自身の最近の経験。それを通して得た、人間というものは管を切つて繋いでも生きるものだ、という感懐が句全体ににじんでいる。「人間は」と冒頭に置いたところに「人間」に対する新たな発見があり感嘆がある。結句ラッパスイセンが句会で論議を呼んだ。

### 雪国のはだれ一閃新幹線

同

新幹線は新に開業した北陸新幹線。東京金沢間を二時間半で結ぶという。まさに「一閃」である。降りかかるはだれのきらめきと疾駆する車体のきらめきと。「一閃」の一語が見事に言い得ている。「雪国」と「はだれ」の重なりが気になるところだが「北陸」にひかれたか。

### 余震あり二月の雲雀地を歩く

陽一

「余震」は先年の東北大地震の余震。そのたびにみんなが肝を冷す。雲雀だつて怖い。だから二月で、雲雀の出番はまだというのに余震のたびに巣を出て不安げに地面を歩き回るのだ。冒頭で「余震あり」と強くズバリ言い切ったところに驚きがでた。

### 蠅一つ隠れもなくて白子干

幸一

日向に干してある真白い白子の上に蠅が一匹。これで

は身の隠しようもない。句の仲間入りをさせてもらつてから一年余の小生。短詩形での一語の重さが身に沁みる近頃です。だから「隠れもなくて」に脱帽。

### 一句鑑賞

増田陽一

### 海棠に雨奥暗き閨魔堂

多美子

しつかりと座つたよく状況の判る句だと思った。海棠と言う櫻より紅色の濃い花の照り。華やいだ外側と暗い奥と言う明暗の対照で閨魔堂の闇が見える。なんでもなような「奥」暗き、が実は練達の技と思う。また、「海棠」と「閨魔堂」の脚韻も効果をあげている。

### 初蝶来座敷深くに紋付けて

みち

何だか蝶が紋付を着て挨拶に来たようで面白い。春早く羽化したモンシロチョウが「去年はお宅の菜園のキャベツでお世話になりました。また今年も卵を産ましてもらいます。」と言ったかどうか。普通、蝶は来ない筈の「座敷深く」が童話的な幻想を誘う。

### 花菜漬のせくる昼の配膳車

紀子

病院か何かの配膳車。殺風景な食膳に季節の花菜漬を見つけた。何と言う安らぎであろう。過ぎ去る季節の淡い感覚。「昼」も効いている。花菜漬は普通菜の花であるけれど、ひと頃我孫子や布佐の土手では「からし菜」が豊富で自生して、句会のついでによく採ってきては一夜

漬に下ものである。

### 乳呑み児の重くなりたり山笑ふ

正美

赤ん坊を抱いていると日々に重くなるのが感じられる。その感じられる重みが春の山に重なり、幸福感が「笑ふ」に繋がる。「山笑ふ」の季語が率直に生かされていて良い。この季語が共感される句は珍しいと思う。

### 白樺の純林地帯斑雪敷く

高志

春の白樺の純林は良いものである。標高高いところの雪も溶けかけている。柔らかい緑の新芽も出ているだろう。斑雪がカーペットの模様をなして林床に「敷かれ」ている、と見た。

### 蓮の根を遺骨と見る程馬鹿でない

啓泰

### 泥蓮を引き出し畦へと生きのびる

〃

蓮の根掘り2句。作者は「遺骨のようだ」と感じてしまい急いで打ち消したのである。不吉と思ったのか。その慌てぶりが「馬鹿でない」である。但し人間の遺骨にはあまり見えない。恐竜の骨だつていい。三鬼に「蓮池に骨のごときを掘み出す」の句がある。

2句目、思いがけなく泥深かった蓮田に脚をとられ、まるで砂漠の浮き砂に掴まった旅人の如く、必死で畦に這い上がったのであろう。2句とも大袈裟で何だか可笑しい。作者一流の諧謔ではないか。

### 毀れてもしおさゝをきく桜貝

幸一

丸山薫に、毀れて砂に埋もれゆく砲壘が、「みんな儚い

原形を夢見ていた。ひと風ごとに、砂に埋もれていった」という詩があり、またそれを朝太郎が評して「これほどやるせない思ひをしながら、この詩人がなほ生活してゐられるのは、その「原形」に帰ろうとする、イデアの儚い意志と希望があるからだ」と言う名鑑賞をしている。

掲句はそれを連想させる。但し、「桜貝」とは何と、初めから毀れやすい繊細な日本的情緒の存在ではある。

### 駅前は白子御膳の幟の波

昭七

「江ノ島」の注があり、江ノ電の駅を降りた途端の、何か春めいたときめきを感じさせる光景であらう。海近くでない、獲れたばかりのなまのシラスは食膳に上らない。季節限定の旅の食事であり、旅どころである。

### 啓蟄の犬の道草土を嗅ぐ

孝三

犬と散歩で、今朝はまたよく道を逸れて土を嗅いでいるなと思つたらなるほど、啓蟄であつた。周りには這い出した生命がうようよしているのだ。人間には見えないけれど、犬には臭覚を通じて異形のものたちの気配が感じられるのである。

### 一句鑑賞

松村幸一

生きてゐるうちは影なき白子かな

陽一

風の音彼方に雉ののびあがる

〃



## 余震あり二月の雲雀地を歩く

〃

一句目、そう言われてみれば、生きている白子は透明に過ぎて影がない。茹でられて干されて、はじめてあえかに影が生まれる。どちらにしたって白子自身には関係ないことだが、生身の失せるのと代償に影を見出した作者の眼は、正しくもののあわれを知る俳人の眼だ。これによって白子がかつてどの例句にも見かけることのない幽玄の命を宿して蘇った。二句目、風の音で切れる。身辺におこった風でまわりの草がそよぎ、そのそよぎの彼方に首と背筋を伸ばした雉の姿を見出した。風の音がいかにも生動して、一句の画面の中をまぶしく吹きぬける。三句目、いつの日の余震であろうか。読み手の思いはまだ記憶に遠くない東日本のその日のことへ行くだろう。作者は発想の源に齊藤茂吉の「千葉県より恋のこころに告げていふきさらぎ空に雲雀啼くとぞ」があつた、と言われた。茂吉の歌の千葉県からの便りには、どことなし明日を約する相聞の心映えがあるように、掲句にも又やがて声をあげて舞い立つ雲雀への強い励ましが託されている筈。

## 初蝶来座敷深くに紋付けて

みち

庭先の外光を曳きながら、初蝶は座敷に紛れこんできた。ひとめぐりして出ようとせず、かえって奥深くへ。冷やかな仄暗がりに蝶の紋様がチラチラと浮き立つ。居

合わせた者の眼には、不意の春の使いのあいさつと受けとれてほほえましい。臨場感を伴って思ひは読み手に伝わる。俳句を作りながらこういう句に出合えるのも、今日を生きるよろこびの一つ。

## 花菜漬のせくる昼の配膳車

紀子

病院の昼どき。廊下を運ばれてくる配膳車の小皿の、ほんのひとつまみの菜の花。健康な家庭の食卓だったらそれほど映えまいが、場所が場所だからみちさんの初蝶の句同様春の明るさと希望を齎らして回ってくるかのように、見る人にはまぶしく見えてもこよう。余事ながら胃ろうだけで明け暮れている多くの家内が、もし意識を戻してこの景を眼の前にしたら、命あつてものが食べられることのかげがえのない贅沢さに、絶句してしまうのではなからうか。

## 乳呑み児の重くなりたり山笑ふ

正美

乳呑み児という出だしからして古めかしく、ぼくみたいな年寄りには綿入れ半纏にくるまるヒビの頬の真赤な嬰兒の姿が、臉上に浮んでくる。つまりはなつかしき昭和の映像だ。でもその古めかしさがあるから、重くなりたるにやつと寝落ちてくれた手応えがずしりと伝わってくるのではあるまいか。さらに座五の「山笑ふ」が、負う者と負われる者への大きな慈愛の微笑となつて背景に暖かく横たわる。この一幅の絵の題名を仮に「幸福」とつ

けても、あながちそむくことにはなるまい。

## ハガキ句四十八報管見

飯田孝三

### 走り根は近道であり蟻の列

敏子

露出する走根の上を陸続き蟻の列が進む。中七「近道であり」に、蟻の生態を衝く実感。有無を言わせぬ説得力がある。断定の力だ。ごつごつとした走根の感触と営々たる蟻のいとなみが一々五感に迫る。

### 山頂の蠅にまとはれるたりけり

高志

山頂は、崇高、清浄の場である。斑尾山の標高は知らないが、殊に野菊が吹かれるなら、ともかく、蠅にま

ハガキ句四十八報（09/7/19）

蟬噪会六月二十六日本土寺

歴代の和尚の墓に百合の花

走り根は近道であり蟻の列

長谷山本土寺山門木下閣

方丈の庇に並び花令法

奥津城に橐駝師一人日の盛り

黒揚羽樹間を飛べるリズムあり

紫陽花に乳房の重みありにけり

花長句碑銀杏・楓の緑陰に

居酒屋は狐狸庵てふ名半夏生

6月30日斑尾山登山

山頂の蠅にまとはれるたりけり

高志

われるとは。俳諧味がただよい面白い。あえて世相諷刺を言うまい。

紫陽花に乳房の重みありにけり

多佳子

むべなるかな乳房の重み。乳房の記憶を失くせば人類は滅ぶ。

花長句碑銀杏・楓の緑陰に

高志

銀杏と楓の木なりの対照が面白い。遺憾にも、その先、花長を知らない。

居酒屋は狐狸庵てふ名半夏生

たか子

あら、この店、狐狸庵先生に縁があるの？先生、お酒おやりになった？半夏生は「時候」。庵のたたずまいが見えてこないのが憾み。

その他の掲載句も、知見が足らず、残念ですが、鑑賞しきれません。ご免なさい。妄言多謝。（平21.7.4）

お便り広場（到着順、敬称略）

先日はお寒い中おいで戴き有難うございました。こちらこそいつもお世話になっておりますのにお気遣い戴き申しわけございませんでした。早咲きの桜賜り誕生日 自分の記念として書き残しておく一句です。どうぞこれからもよろしくお願ひ申し上げます。末ながら御主人様によろしくお伝え下さいませ。（2/23 吉羽多美子）

高志兄 お葉書有難うございました。先の内視鏡治療

に加え、周辺の部分切除をした方が、先々、より安心と  
のことでそれを受けることにしました。来週、手術（腹  
腔鏡による）は来週の予定、術後十日〜二週間で退院し  
ます。再会がずれ込み残念ですが、今月も欠席投句させ  
て頂きます。電話不在でしたので取り敢えず用件のみ、  
ご自愛御健吟を、

（2／14 孝三）

寒暖定まらぬ中、明日から三月、言い古された言葉な  
がら、光陰矢の如しでございませぬ。「白金葎」ご恵送下  
さいましてありがとうございます。誌名の植物の写真で  
今迄見た事が無いように思います。水辺の植生なのでし  
ょうか。すつくとしたたすまいでさわやかに感じました。

高志様の

山焼きの炎二気に山登る

情景がまざまざと見るようで一番の秀句と存じ上げま  
した。牧羊犬の御句もさぞやと思いました。ありがとうございます。  
ございました。ご健吟を。（裏に梅に目白の絵）メジロは  
拙宅の庭に「つがい」で来ております。十種以上の野の  
鳥が訪問してくれます。

（3／1 長屋璃子）

句会報二月号ありがたく頂きました。長屋さんのお便  
りがあり楽しく読ませて頂きました。山尾さんの句会報  
を毎号長屋さんから頂いていてその文章力に驚いていま  
す。思いたって力学演習を開いたところ、第一ページつ  
まづきねています。読みもしない本を五六冊いつも一二

階への往復に持ち歩いています。元気でいます。皆様の  
益々の御活躍を祈ります。

（3・1 小山陽也）

「白金葎」二月号嬉しく拝見しました。皆さんのご健  
吟ぶり頼もしく思います。この度は突然ご心配をおかけ  
し、申し訳なく存じます。自覚症状無皆、自身思いがけ  
ぬことで、方々にご迷惑をかけてしまいました。先月十  
八日、部分切除術をうけ、以後順調に推移しています。が、  
寄る年波のせいでしょうか、胃腸の機能回復が遅れ気味  
です。要は日柄の問題との主治医の話です。早く再会し、  
歓談・放談を楽しみたいものです。花の便りも間近く、  
ご夫妻始の皆様のご自愛ご健吟をお祈り致します。不二

（3／5 飯田孝三）

会費同封します。古代は別便です。小学校から高校迄  
の同級生（級は一緒になったことはありません）が、音  
楽会、落語会と今度二十一日はアルゼンチンタンゴを聞  
きにいきます。音痴、〇〇にはどうかと思っています。

（中略）斑雪、なだれ、白子、なだれはわかりますがあ  
との二つはわかりません。そのうち、吟行に参加できれ  
ばと思っています。それにしても参加している皆様はす  
ばらしいです。益々のご活躍を祈ります。三月十日（嘗  
ての戦災の日です）

小山陽也 拝

（斑雪 はたれのはたれ は斑雪のルビです。漢字の右に書くと同間を広く  
取るので、便宜上 上付きで書いております。白子はしらすのこ

とです。編集子)

この度は、高価な果物のお見舞いを有難うございました。早速、妻が知らせてきました。ご心配やご迷惑をおかけするばかりですのに、温かいお心遣いを頂き、感謝の外ありません。お蔭さまで、其の後も間々あるといわれる余病の併発もなく経過に至って順調です。只、残った胃腸の機能回復に思いの外手間どっています。老人に多い症例といわれますが、毎日院内を四五千歩、巡廻しています。点滴をぶら下げて。要は日柄次第ということのようです。左のような情況で、三月例会も引きつゞき休ませていただきたいと存じます。(出句後便) 会員諸氏よろしくお伝え下さい。ご健吟を祈りあげます。お礼まで。

(3/13 飯田孝三)

謹啓 春とは名のみ厳しい寒さがこのところ続いています。諺にあるように三寒四温を繰り返しながら春になるのだと感じます。白金蔭二月号拝見しました。編集発行等々忙しく暮らしているのが目に見えるようです。みちは敏子さんの俳号かなー? 句を考えること認知症予防になりますね。私も時々気の付いたこと書いてみますが、恥ずかしくて出しにくい。最近少し年いったなーと感じることがままあります。芥川賞直木賞姜尚中等本を良く読みます。吉野弘の贈るうた等は勉強になります。読むこと書くこと歩くこと等認知症にならないようそれ

なりに勉強しています。先日三月一日に高田和彦の一周忌へ参つて来ました。皆元氣そうでした。こちらことはあまり良い楽しい事もないのもうこの位で止めます。私も残された人生 明るく 楽しく ゆっくりと暮らして行くことだと考えています。私にとつて一つ嬉しい事がありました。五人目のひ孫が生まれたこと、智恵子の長女の子二月二十二日誕生、女の子でした。今年も最後になるか分らないが田植をしようと考えて準備中です。今日はこの辺で終わりにします。健康をお祈りします。  
**読み書きに歩くをそえて老いの春**

(老の春は初春という新年の季語になっています。初春<sup>しゅん</sup>は春の季語です。**読み書きを終えて散歩や梅の花** とか、下五の季語の幹旋<sup>あつせん</sup>を考えてみて下さい。吉野弘の詩は成田ちる(晶子のペンネーム)が好きでよく読んでいます。高志)

高志 敏子様

(3/10 榎田健三)

めずらしく早出送稿よろしくおねがい致します。昨日房総日替り行。南端和田浜漁港で鯨が獲れるそうで高値のさしみを食べました。鮮血なれど腹痛無用でした。鯨の身長10m位だそうです。民宿食堂のおやじの能書。

(H. 27・3・12 青木啓泰)

三月例会も休ませていただきます。ひだりのとおり出句いたしますので、お手数ですが、よろしくお願い致します。(出句) 胃腸機能も、遅ればせ、歯車がゆっくり動

き出したとのこと（主治医診断）再会が楽しみです。

光成高志さま

（H27・3・17 飯田孝三）

昨日の句会では大変お世話になりました。茂吉・三鬼・折口信夫までポンポンと出て知識不足ながら楽しかったです。5月1日の吟行の件ですが、帰宅してから考えますと、四月末から娘宅へ、五月初旬はお母さんコーラス千葉大会（昨年は当日朝ギックリ腰でキャンセル）その後白内障の手術となっており、ご配慮いただきましても体力がありませんのでお知らせいたします。活力あふれるお二人の佳句を楽しませてください。ほんとうにごめんなさい。（3/21 倉田紀子）

### 受贈誌（H27年3月号）

初蝶ぞ今日如月の終りの日（彩121号）

平野ひろし

二月尽ソーラーパネル日に光る（二）

〃

障子替へ白き光の函の居間（二）

河端不二子

鵜飼果つ満天の星きらめきて（二）

高田トミ子

冠雪の富士に安堵す帰国便（飛行雲74号）

駿河岳水

村上は妻のふるさとのつべ汁（二）

〃

何気なく愁思の妻が鍋焦がす（二）

菰田淳郷

菖蒲田を覆ひ隠して落葉かな（あすか3月号）

山尾かづひろ

朱子学に疎しと言へど清和かな（俳枕174）

長屋璃子

### こだま

現代俳句協会…俳枕江戸から東京へ（216）山尾かづひろ著  
雛人形皆白面がおそろしき  
光成高志

体育の日スマホを撫づるばかりにて

〃

（飛行雲74号 駿河岳水選）

### 俳窓評論纂

\* TSUNISO ツーソーという昆虫界唯一の週刊誌を陽一さんから頂いた。No. 1517（2015/1/2）に「1974年・北海道蝶採集ドライブ」増田陽一が掲載されたB5版15頁の紀行文である。これが非常に面白い。スピードに乗ったリズムある文章でどんどん読めて自分が実体験しているようで愉快であった。芭蕉に「五月雨の鳩の浮巢を見にゆかむ」に少し俳ありという自解ある句があるが、北海道の蝶採集にいかむとして実行された文章である。なにがそんなに面白いのか。筆者も1972年に苫小牧からフェリーで東京港に帰った経験がある。著者のフェリーは東京釧路間30時間の極度に閑な時間（30時間の天国的な退屈な時間）を提供した。筆者のは24時間という航路の筈であったが、三陸沖で遭難船を捜索するというハプニングがあり30時間かかった。その偶然の一致が先に昭七さんの斑鳩紀行と同じ感慨をもたせた。それはどうでもいい

ことだが、のっけから追体験をしたし、蝶の名前がカタカナでかかれてあり、無機質の書きようであるが、これが皆命ある昆虫なのである。雄雌の表記が♀♂なのも学術的で懐かしいのだ。時々悦子夫人の会話が出てくるのおほどかで明るい。表紙に車の窓から顔を出して網を掲げた陽一さんが載っている。その顔のなんと楽しそうではないか。筆者はこれで陽一さんのすべてが分ったような気になった。こういう少年のような顔が出来る人でなければ、蝶採集に地球の南や北を歩きまわれないのだ。筆者も北見から網走まではバスで走ったことがあり、「馬鈴薯の花咲く広き北海道」という句を作ったことがある。網走から斜里を経て知床半島に入り「オシンコシンの滝」を見てウトロ港に着き、そこで昼食のおにぎりを取り、斜里まで引き返し、山側の真直ぐな直線道路を飛ばし、小清水町、野上峠、屈斜路湖を見て川湯まで駆け下り摩周荘に予約して摩周湖を見て戻る。屈斜路湖から阿寒湖まで行き、砂湯に戻り、屈斜路湖をボートで漂い、翌日は、美幌峠まで行つて引き返し、弟子屈から虹別、西春別まで行き、ここで悦子夫人は根釧原野をもっと先にといわれたようだが、陽一さんは勘弁してくれということで、標茶経由でどんどん駆けて釧路に帰つて旅を締めくくった。ここまでは筆者もみちと一緒にバスで走ったコースなのでよく理解できた。北見までは西の帯広、狩勝

峠、鹿追、石北峠、留辺蘂から北見に入られたのだから、道東をぐるり一周されたのだ。蝶のことは門外漢なので触れられなかった。カタカナ名の蝶に陽一さんはその紋様まで想像できるに違いないと思つた。いつか見せてもらつた箱にずらり並ぶ標本をマスとして記憶しているに過ぎない私に比べ。

## 旅のうたを読む

### XIII

武者昭七

母

吉田一穂

ああ麗しい距離  
デスタンズ

常に遠のいてゆく風景・・・  
悲しみの彼方、母への

搜り打つ夜半の最弱音。  
ビアンシモ

〔海の聖母〕

旅とは移動です。僕らは単に「地理的な空間」を移動して歩くだけでなく時にそれを超えた「時間」という空間を移動します。「回想」という精神作用がそれです。回想という旅の中で僕らはさまざまな風景や友人に出会います。しかし、つかもうとしてもつかめない、つかもうとすればするほど遠ざかってしまう風景、それが「回想」です。

この詩はそんな「回想」の中だけに存在する母への思

慕(ノスタルジー)をうたいあげています。第一連の「麗しい距離」とか「遠のいてゆく風景」とかいう言葉がそれを明かしています。母は遠くにいるのです。

そんな母への唯一の道、それがこの場合、ひそかに「捜り打つ」夜半のピアノシモというわけです。それだけが「悲しみの彼方にある母」へ到りつく道なのです。

言葉を極端に削り取り、各行を体言で括ったことから生まれた静けさ、的確にはめ込まれた形容詞からにじみ出る哀愁と思慕の念、それらが特定の母を超えて、遠いあるいは遠ざかってしまった「母なるもの」への僕らの思いを誘います。

作者は明治三十一年北海道生まれ。早稲田大学英文科中退。大正十五年第一詩集「海の聖母」で詩的位置を確立。大正・昭和を通して典雅な象徴詩風の作品で知られた。

2015・01・26

## 芭蕉の軽み以後 (36)

光成高志

寛文十二年に江戸へ下る二十九歳の時出版した『貝おほひ』は、それまでに積み上げた学問を突き破り時代の風潮も取り込んだ晩年に唱える軽みを持った俳諧本となっている。芭蕉自身は軽みには無意識であつたであろう。それは二十代に学んだ貞門風に物足りないものを感じて、談林風なものを先取りした傾向があつた。江戸へ出てから、桃青と名乗り、延宝年間には宗因歓迎の百韻に一座す

るなどして宗因を大いに賛美した。古典文学を踏まえた語り謡曲の言葉をはめ込んだり縁語・掛詞を使い常識をひっくり返す寓言などを自在に使って発句を作るのは、それなりの学問的蓄積が必要であるが、更にそれを才気煥発に導き出す才能があつて十分となるのであつて、延宝年間の桃青はこの必要十分条件を備えた只一人の俳諧師であつたと思う。延宝四年に帰郷し、その秋江戸に戻つてから、桃青の談林俳諧が活発になつた。延宝五年の「六百番俳諧発句合」(風虎編)、同六年「江戸通り町」(二葉子編)、同年「江戸広小路」(不卜編)、同年「江戸新道」(言水編)、同七年「江戸蛇之鮎」(言水編)などに桃青の発句が発表されて、江戸俳壇では名が通るようになっていた。新井白石は芭蕉より十三歳遅れて生れた江戸中期の学者であるが、この頃牢人をしていて俳諧にも凝つていた。自伝『折たく柴の記』には一言も書いていないが、室鳩巢の書簡集「兼山秘策」の中に桃青などと競りあつた、桃青も歌人にて、李白を学び候て桃青とつけ申候由に御座候と書かれてあることから見ても、桃青が江戸俳壇に確固とした地歩があつたのだ。延宝八年の冬に日本橋から深川に隠棲した。隠棲と言つたつて、弟子達の援助があつたので、移住と言うべきであるが、それまでの桃青の俳諧活動・作品をよく吟味することが移住の理由に触れるのではないかと思う。延宝五年の正月は門松の句を

作ったのであるが、春の句として、一休和尚が比叡の山法師どもから読みやすい大文字を所望されて、金堂から麓の坂本まで紙を継がせて、真直ぐに「し」の字を書きながら駆け下りたという笑話（『二休ばなし』）によって大比叡やしの字を引いて一霞（霞）

桃青

という句を作っている。一休和尚の縦に引くしの字を横に一字に引いた感じに大比叡に霞が横に長くかかっているというのである。

猫の妻竈（ひ）の崩れより通ひけり（猫妻恋）

桃青

昔男の業平は築地の崩れから忍び通いをしたが、猫はやっぱり猫。恋猫となれば、発情した雌猫が雄猫を求めて、築地ならぬ竈の崩れから通ってくる。伊勢物語の場面を男女逆転させて俗にもじっている。

## 我孫子日記

2/20 例会  
2/25 SOA  
3/5 SOA  
3/10 SOA  
3/13 八重洲  
3/17 山城  
3/18 SOA  
3/20 例会

\* 築地→新松戸

\*2 赤城

\*途中下車してげんげ田に憩ひけり  
春の地下鉄本読む人もをりにけり  
バック詰め野蒜の玉を揃へ売る  
三尺の一本鱈氷詰め

泡吹いて泥鰻はまるくまるく生き

蓋取れば米国産の白蛤

ソーローを学びし話題春の昼

\*2 春興や桃の木川と一人旅

斑雪雑木の影も明るけれ

白樺の林の明し斑雪山

啄木鳥の突く音響く斑雪山

## 編集後記

夕食前に散歩に出て公園で鉄棒にぶら下がり月星を見上げる。昨日は月の回りの星座がなんとか見えた。昔エッセイに書いた冬の大三角、冬のダイヤモンドが見えた。日暮れて中天に来ているのだ。これだけでも季節の移っているのが判る。櫻の開花も発表され、来週は花見で世は活気づくのだろう。

孝三さんの復帰が間近い。男お三方の鑑賞を今月も頂きなんとか16頁に編集できました。昭七さんの旅のうたは今月で終り、次号より恋のうたが始まります。

白金霞 第49号  
FAX 04・7187・1068 平成27年3月発行  
270・1119 編集・発行人 光成高志(TEL &  
14・17  
表紙の題字・加納綾女 写真3月26日の白金霞